

## マツノト遺跡2004の概要

中村友昭  
熊本大学

NAKAMURA Tomoaki  
University of Kumamoto

### 1. 遺跡の位置と環境

マツノト遺跡は、鹿児島県大島郡笠利町宇宿字マツノト2117番地に所在する。遺跡は奄美大島の北部、笠利半島の東海岸に面した海岸砂丘に立地する。遺跡は海岸に沿う南北200mに形成されており、北側は喜子川で切断され、南側は台地に連続する。遺跡は1991年の開発工事と緊急発掘調査<sup>(1)</sup>によってそのほとんどを消失し、現在その北端部分が、包含層を剥き出しにしたまま残っているに過ぎない。今回の調査区は残存する北端部で、標高6.0mから7.0mの緩傾斜面をなしている。

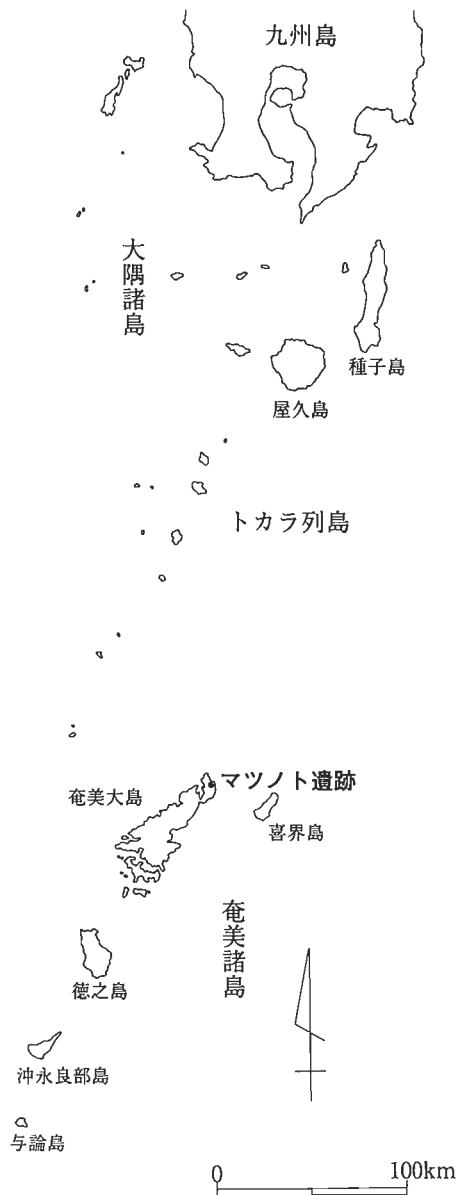


図7. マツノト遺跡の位置

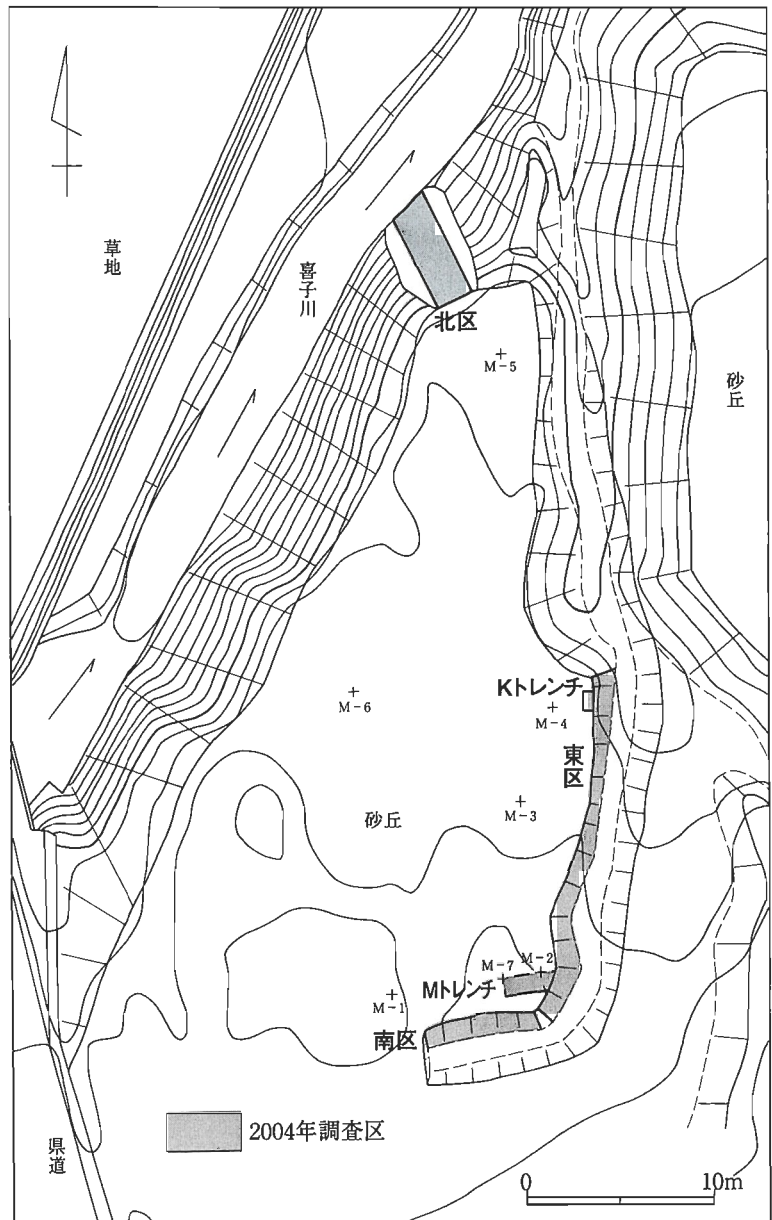


図8. マツノト遺跡調査区設定図

## 2. 調査の目的と方法

マツノト遺跡は1991年に笠利町教育委員会によって調査がおこなわれている。この調査は緊急発掘調査であったため、層序の記録が必ずしも十分ではなかった。したがって、今回の調査では遺跡の層序を確認し、前回調査との整合をおこなう。これが第一の目的である。

第二の目的は、遺物包含層の確認である。前回調査では、無遺物層である白砂層を挟んで第1文化層と第2文化層という二つの遺物包含層が検出された。両層は出土遺物の様相を明確に異にした、新旧2時期の文化層である。今回の調査でも、この二つの包含層を検出しその遺物の様相を再確認することを目指した。

マツノト遺跡は考古学的な価値の高い遺跡であるにもかかわらず、緊急調査によりその多くを消失し、現在わずかにその一角を残すにすぎない。今回の調査では遺跡を残すことを主眼に、すでに崖面として現れている部分を清掃して層位関係を確認し、面的には最小限度の発掘をするにとどめた。具体的には以下の作業をおこなった。

1. 層の堆積状況を確認し、断面図を作成する。
2. 調査区を最小限度に設定し、遺物の出土位置を記録する。

まず断面状況確認のために、遺跡の方角にあわせ北区、東区、南区の3区を設定した(図8)。北区は、近くを流れる喜子川によって砂丘が削られ、崖面をなす地区である。東区は、海岸に沿って配水管を埋設したときの低い崖がそのままのこっている。当初この崖を2～3 mおきに清掃したが、1991年調査で検出した第2文化層を確認できなかった。そこで、壁面を全面的に清掃し、一部重機を使用して深堀し、層序の確認をおこなった。南区は、1991年調査区に最も近い位置にあり、緩やかな溝をなしていた。東区同様、重機によって掘り下げ、層序を確認した。

一方、これに並行して、遺跡の平面図作成と発掘調査区を設定した。設定した調査区は2箇所、南区東端に近接する2.0×1.0mの調査区(Mトレンチ)と東区北端に近接する1.0×0.5mの調査区(Kトレンチ)である。両調査区とも、層位を確認しながら掘り下げをすすめ、出土遺物はその位置を平面図に記録した。Mトレンチは、遺物の広がりにもない、漸次東側へ拡張した。

本調査では、遺跡の形成過程を多角的に解明するために、脊椎動物遺存体、貝類遺存体、植物遺体、堆積学、根成孔隙についての調査も並行して実施した。これらについては、定量的な分析のために、複数個所で土壌サンプリングを行った。

## 3. 調査の概要

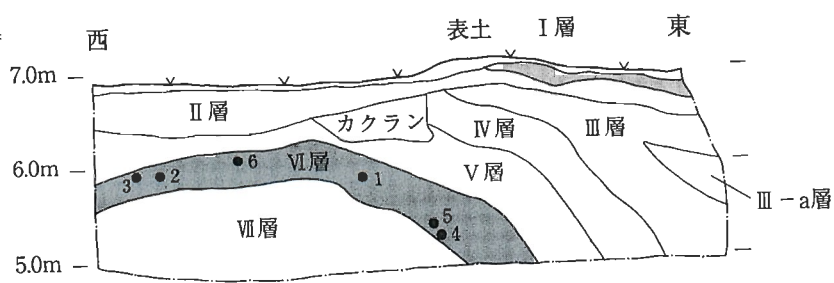
発掘調査は笠利町教育委員会が主催し、これに並行して科学研究費研究による自然科学等諸調査(本研究)を実施した。調査は、2004年10月25日から10月31日の期間でおこなった。発掘調査では中村友昭がフィールドマスターを務めた。

調査参加者は以下の通りである。なお、調査参加者の所属は2004年当時のものである。

調査参加者

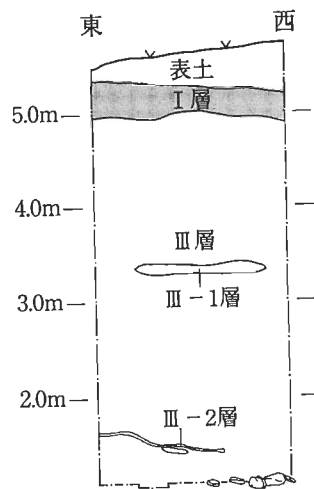
発掘調査：中山清美(笠利町教育委員会)、中村友昭、南健太郎、森幸一郎(以上熊本大学大学院修士1年)、仙波靖子、西山絵里子、牧野幸子(以上熊本大学文学部考古学研究室3年)、清水恒志、高平愛子、津田勇希(以上熊本大学文学部考古学研究室2年)、石井龍太(東京大学大学院)、名島弥生(慶応義塾大学大学院)

自然科学等諸調査：木下尚子、杉井健、大坪志子(以上熊本大学文学部)、岸本義彦(沖縄県埋蔵文化財センター)、黒住耐二(千葉県立中央博物館)、佐藤幸一(北里大学)、新里亮人(伊仙町教育)

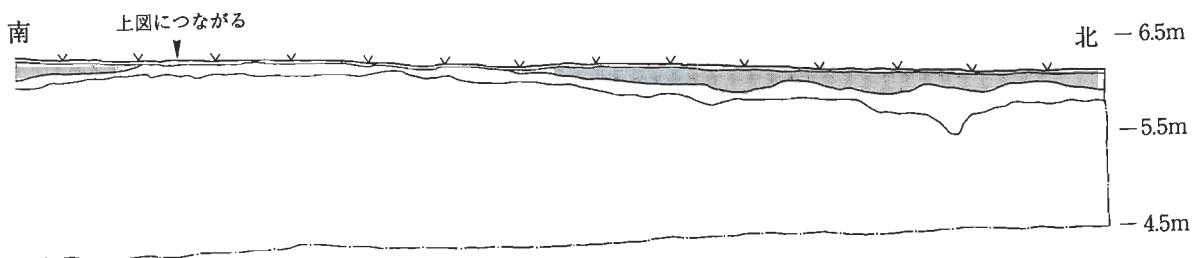
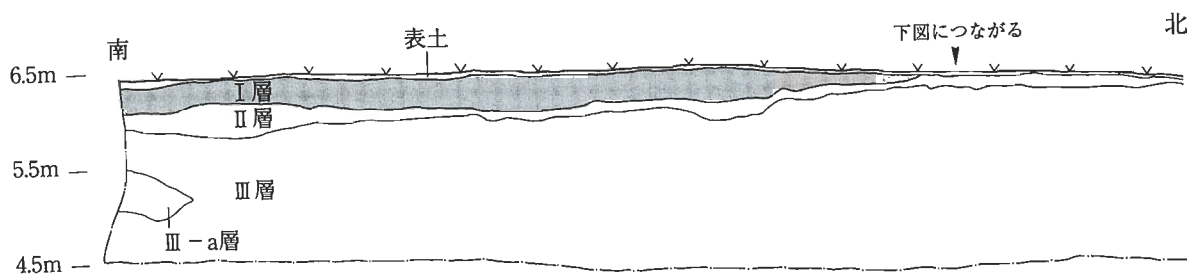


9-1. 南区断面図

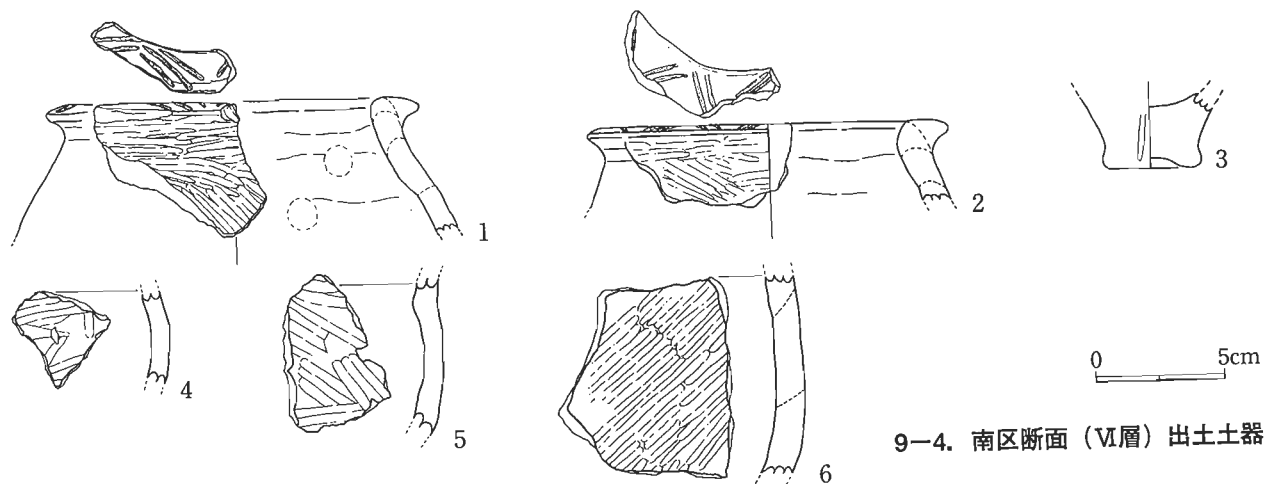
- ※1 トーン部は遺物包含層
- 2 南区断面図中の番号は下の遺物実測図番号に対応



9-2. 北区断面図



9-3. 東区断面図



9-4. 南区断面 (VI層) 出土土器

図9. マツノト遺跡2004断面図及び出土土器実測図

委員会)、樋泉岳二(早稲田大学)、中村愿(北谷町教育委員会)、西野望(矢掛町教育委員会)、松田順一郎(財団法人東大阪市文化財協会)

#### 4. 層序(図9)

基本層序を以下に説明する。

表土 黄褐色混砂土層。全調査区で検出。Mトレンチでは、包含物や根の繁茂状況により4層に区分した(表土(1)~表土(4))。

I層 褐色砂層。遺物包含層。全調査区で検出。多数の貝殻や土器を包含。1991年調査の第1文化層に相当。ただし、Mトレンチでは西半部にかけてI層が北側へ広がる。

II層 黄橙色砂層。無遺物層。よく締まる。北区を除く全調査区で検出。Mトレンチからはその上部に少量の遺物が出土。

III層 黄橙色砂層。無遺物層。締まりなし。全調査区で検出。粘質や土色の異なるブロックを、北区で2層(III-1層、III-2層)、南区と東区で1層(III-a層)確認した。

IV層 黄橙色砂層。無遺物層。よく締まる。南区でのみ検出。

V層 黄橙色砂層。無遺物層。締まりなし。南区でのみ検出。褐灰色の小石礫を含む。

VI層 浅黄橙色砂層。遺物包含層。南区でのみ検出。やや締まる。褐灰色の小石礫を多く含む。土器片を断面状で検出。1991年調査の第2文化層にそのまま相当するかどうか検討が必要。

VII層 浅黄橙色砂層。無遺物層。締まりなし。南区でのみ検出。

I層からIII層は調査区全体に広がっているが、IV層以下の層は南区でのみ認められた。これらは海側(東側)へゆるやかに傾斜している。

#### 5. 遺構

平面的な発掘調査、および断面からの観察をおこなったが、明確な遺構は認められなかった。

#### 6. 遺物出土状況

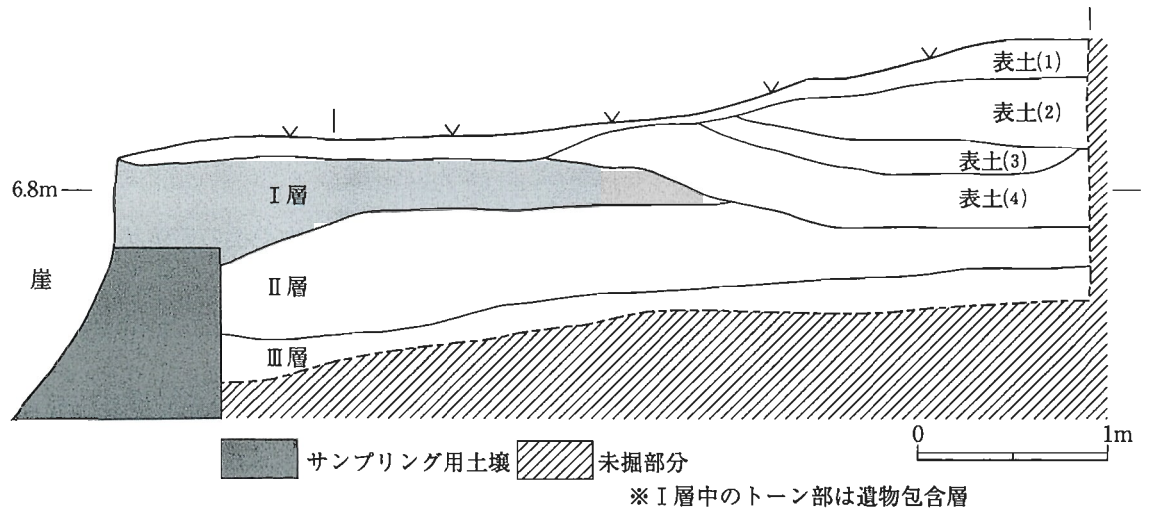
各調査区ともI層で遺物が出土している。Mトレンチでは、遺物は調査区東側を中心に分布しており、その西側には少ない(図10)。南区の断面では、VI層において層の東側への傾斜にともなって遺物が出土した。全調査区において、I層では土器片171点、ヤコウガイ製貝匙3点、須恵器1点(胴部破片)、鉄器1点(形状不明)が出土し、VI層では土器片6点が出土した。

#### 7. 出土遺物(図11)

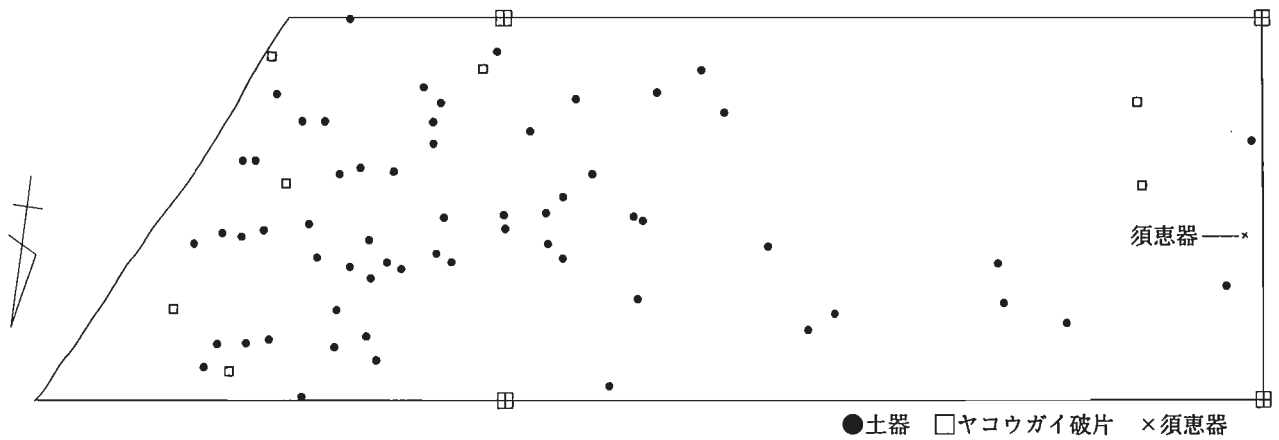
笠利町教育委員会による正式な報告(2006年3月刊行予定)の前なので、時期比定に必要である代表的な土器について報告する。

I層出土の土器は、兼久式土器が主体である。横位に刻目突帯を一条めぐらすもの(図11-3、以下同じ)、それに沈線を施文したもの(4・5)が該当する。また、縦方向に粘土を貼付したもの(6・7)など、兼久式土器の範疇から外れる土器も出土している。底部は、外底面に木葉痕を有したくびれ平底(9・10)が主体である。なお、I層から須恵器の胴部破片1点が出土し、これが1991年調査で出土したものと接合した。

南区VI層の断面からは、I層とは様相の異なる土器が出土した(図11の1・2・8、図9の1~6)。これらはすべて外器面が丁寧に磨かれて器面に光沢をもつ。口縁部は逆L字状に外反し、口唇



10-1. Mトレンチ南壁断面図



10-2. Mトレンチ I層出土遺物平面分布図



10-3. Mトレンチ I・II層出土遺物垂直分布図

図10. マツノト遺跡2004 Mトレンチ断面図および出土遺物分布図  
(10-1、2、3はそれぞれ対応する)

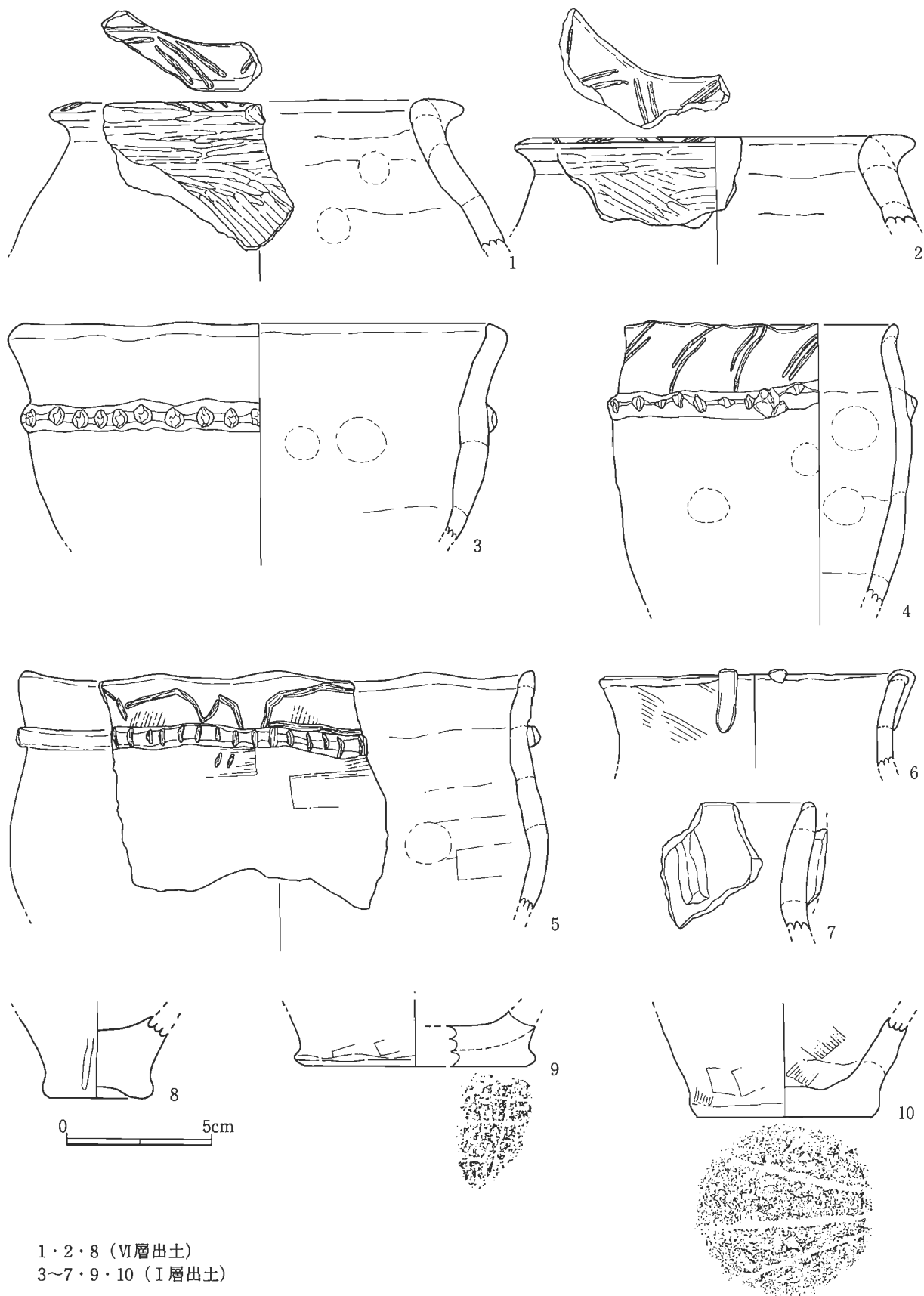


図11. マツノト遺跡2004のおもな出土遺物

部外面に2～3条を一単位とした沈線を施文し、底部はやや上げ底である。これらが同一個体である証拠はないが、共通性のきわめて高い一群であることは確実である。

## 8. 成果

マツノト遺跡の北端に残留する遺跡を、その北側、東側、南側の3箇所において層序と包含層の状況を確認した。その結果、遺物を含まない白砂層を挟んで上下に2層の文化層を確認することができた。上の文化層は、遺跡の全面に広がっているが、下の文化層は南側でのみ確認され、北への連続は認められなかった。また上の文化層に遺物が豊富に包含されている状況を、一部で確認した。

1991年調査でも、無遺物層を含む上下2枚の文化層が検出されている（第1文化層と第2文化層）。このうち、第1文化層は兼久式土器を主体とする層であり、第2文化層はそれを遡る時期の層である。今回調査したI層は、兼久式土器を主体とする層である。また出土した須恵器片が前回調査の第1文化層において出土したものと接合している。以上から、本調査のI層と前回調査の第1文化層は同一文化層とみていい。

第2文化層についてはどうだろう。我々は当初、南区の断面上で検出したVI層が前回調査検出の第2文化層に対応するであろうと予測していた。しかし、断面上で検出した土器片の特徴（口縁部形態や外器面調整）は、1991年の第2文化層出土土器のそれとは明らかに異なっている<sup>(2)</sup>。したがってVI層と第2文化層はそのまま対応しているとは決めがたい。このことは、1991年調査時の写真（中山1996の巻頭カラー写真）によっても確認できる。これらによると、マツノト遺跡第1文化層の下には複数の黒色層が認められ、またこれらの現われ方は断続的だからである。

以上から、マツノト遺跡には、遺跡の全面にひろがる兼久式土器を主体とする文化層（1991年調査・2004年調査の第1文化層）と、これより明らかに古い2時期の文化層（1991年調査の第2文化層と2004年調査のVI層）の存在したことが、今回の調査で明らかになった。

なお、2004年I層で採取した木炭片2点による放射性炭素年代測定結果（地球科学研究所による）は、以下のとおりである。

1. calAD410～650（95%の確率）、calAD450～620（68%の確率）
2. calAD240～620（95%の確率）、calAD370～540（68%の確率）

謝辞：本稿をまとめるにあたり、中山清美氏をはじめとする笠利町歴史民俗資料館の方々、名島弥生氏（慶応義塾大学）、森幸一郎氏を中心とする熊本大学考古学研究室の学生諸氏に多大なご助勢を賜った。末筆ながら記して謝意をあらわす。

（注）

1. 中山清美1992「マツノト遺跡発掘調査概報」『奄美考古』第3号 pp. 15-38  
中山清美1996「マツノト遺跡の発掘調査」『奄美考古』第4号 pp. 11-19
2. 本書第5章中村「奄美諸島の古墳時代併行期の土器」参照。

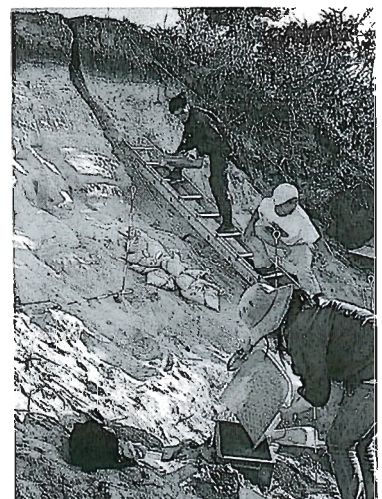


写真3 マツノト遺跡2004北区  
崖面の清掃作業

（左から石井龍太、津田勇希、  
仙波靖子の各氏）